

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「よらんかね・よってけて」

先回（当欄2月号参照）の『京のぶぶ漬け 越後の湯漬け』を読んだ方から、「あの、私のことじゃありませんよね」という問い合わせをいただきました。いえいえ、あなたの事ではありません、どうぞご心配なく。今回初めて読んだ方は、「何のことやらわからなくて…」の話でしょうが、要は他人の家を訪問した際のマナー、引き際のことで（詳しく知りたい方は、2月号をお読みくださいね）。

一般的に方言には、その土地ならではの言い回しで心の機微を相手に伝える効果があります。新潟のことばも、微妙なことばの表現の変化でその場に即した言い回しをしています。

前述の「湯漬けでもなじら？」は、もう時間だから帰ってね、といったその家からの退出を促す慣用句ですが、では、その前段階の「訪問」、それも約束のない時の訪問はどうするか？

「新潟のしきたり・おとなの暗黙マナー」をこっそり解説いたします。

たとえば、出先でたまたま知り合いに出くわした時「近くだから、よらんかね？」と言われたら、さてあなたはどうしますか？

「じゃあ、せっかくだから…」と後に続いてどこかいきなりあがりこんではいけません。「いや〜…」と少し頭を傾げ、顔はちょっとうれしげ、といった感じのもじもじ感が大切です。「よらんかね」が単なる社交辞令なら、「あっ、そっかね、ではまた」で、相手はさっさと家かどっかに行ってしまうと思います。

ホントに家に寄って行ってほしい場合は、「よってけて」とリズミカルなお誘い慣用句が飛び出します。やれ、うれしや、とここであがりこみたいとこ

ろですが、そこは、しょうしがりで奥ゆかしさをよしとする越後人。「いや〜、突然ですから…」とまだもじもじする方が好印象。すると生粋の越後人の相手は、「遠慮しないで、あがらんかね」とお誘いいたします。

「寄る」から「上がる」に昇格したらしめたもの、控え目ながらも喜びを秘めた態度でお宅に立ち寄りましょう。その際も、にこにこ・もじもじ感はお忘れなく。「よっ、待ってました！」とばかりに勢いよく靴を脱ぎ散らかして玄関マットに足を乗せないように。玄関でまだもじもじのあなたに「ほれ、あがれて」もしくは「あがりなせや」の用語が出たところで、喜んで靴を静かに脱いでおじゃましましょう。

「いっやや、面倒ら〜！」というなかれ。「よらんかね」（社交辞令）⇒「よってけて」（まだ社交辞令）⇒「あがらんかね」（小勧誘・原級）⇒「あがれて」（中勧誘・比較級）⇒「あがりなせや」（本勧誘・最上級）⇒「あがれてばね」（命令）と微妙に変化することばで、お互いほどよい関係を保ってきた先人たち。相手に気遣いつつ、上手にお付き合いをする越後人の生活の知恵と暗黙の掟は、くらしのことばにもみられます。

